

第一部門 〈哲学・思想に関する論文〉 入選論文

小林秀雄批評における「信仰」のありか

―ベルクソン哲学との比較を通して―

川
里
卓

かわ さと すぐる
川 里 卓 さん

[略歴]

- 年 齢 34歳
- 住 所 フランス共和国パリ市14区在住
- 略 歴 静岡県静岡市出身
静岡大学人文学部卒業。名古屋大学大学院人文学研究科博士前期課程哲学専攻及びフランス国立東洋言語文化大学日本学研究科にて修士号を取得。名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程哲学専攻修了。博士（文学）。フランス国立東洋言語文化大学日本学部専任講師を歴任。現在パリ・ナンテール大学にて二つ目の博士論文を執筆中。
- 著 書 『「実在」へのアリア 小林秀雄のベルクソン受容から』晃洋書房、2023年。

[応募動機及びコメント]

これまで主に小林秀雄の西洋思想や芸術に関する批評の分析を行ってきました。しかし中期から後期にかけての小林の日本思想に関する研究を十分に行うことが出来ていなかったため、本論文で小林の世阿弥や本居宣長論を扱いながら、小林批評における「信」の特徴を示したいと考えました。小林の思想においては、「美」（感動）と「信」が切り離せないものとして捉えられます。まず無意識の（非人稱的）次元において「美」（感動）が所与の強烈な体験として与えられ、この意識的理解を超えた根源的な契機を主体的（人稱的）に把握していく意識的プロセスのうちに、芸術表現と不可分な「信じる」行為の本質的な特徴があります。今回の論文は上記の観点から小林批評の全体を再構築するプログラムの一端を担ったもので、その途上において暁鳥敏賞を受賞することができ大変光栄に思っています。今回の受賞を基盤にこれからも研究に励んでいきたいと思っております。

〔要旨〕

本論文の目的は、ベルクソンから小林秀雄への思想的影響関係を示しながら、小林批評における「信じる」行為の特徴を説明することである。ベルクソン哲学においては、実生活への有用性に向けられた知的・空間的な認識と、時間的持続としての「意識に直接与えられたもの」を把握する真の認識という二元論がその基盤にある。前者は特定の「観点」に基づき、言語などの「シンボル」に依存する二次的な思考プロセスである一方、後者は事象をその内部から把握し「絶対」に至ることが可能であるとベルクソンは考える。

ベルクソンの二元論を継承する小林批評においては、ベルクソンにおける「意識の直接与件」は自己の意識を超えた圧倒的な〈何か〉として受容され、この根源的な所与の体験を能動的かつ主体的に把握していく認識プロセスが「信じる」行為として特徴づけられる。本居宣長論においてはこの「信」の働きの背後に神々の動性が想定され、事物の「性質状」を開示する根源的な「言霊」の力に与ろうとする精神の能動的な関わり（信）が、遙か彼方から来訪する神々及びその生成の現場に古代の人々を立ち会わせたとされる。

このように、事象の「内容」理解とは異なる、精神に直接与えられた根源的で強烈な体験を把握していく創造的な認識態度が、「信」という言葉とともに小林批評では強調される。ここに小林が継承したベルクソン哲学と異なる彼独自の批評の形成と、批評対象を通して垣間見える、「創作」としての批評と結びついた小林自身の「信」の特徴が読み取れる。

批評家小林秀雄（一九〇二—一九八三）は近年国際的にも研究が展開され、今後更なる詳細な研究が求められる批評家である。現在までの先行研究においては主に、小林が「何を批評の対象とし、何を論じているか」という枠組みを基盤にし（柄谷行人「交通について」、一九八九など）、小林が批評内容よりもむしろ、作品を読み感動させられたという自らの主観的体験を、批評という媒体によって表現している点を等閑視している傾向が強かった。これは批評を「科学」として捉え、既存の解釈を批判し新たな観点から別の解釈を提示することが「批評」であると考えていることに起因している。

小林は「美のイデオログ」として橋川文三の批判『日本浪漫派批判序説』（一九六〇）を筆頭に、戦争中における政治思想との関連からこれまで多くが論じられてきた。しかし、戦争から時を経て、政治思想とは異なる観点から小林研究に光が当てられている。その代表的なものとして、小林が批評において原作を「創作」しているとした山城つみ（『小林批評のクリティカル・ポイント』、一九九二）、小林批評をジャンルという観点から分類した二宮正之（『小林秀雄のこと』、二〇〇〇）、小林批評における思考の論理を取り出そうとした森本淳生（『小林秀雄の論理』、二〇〇二）、「原郷世界」という根源的なイメージを分析の基礎にした佐藤正英（『小林秀雄』、二〇〇八）、小林批評をドゥルーズの方法論に基づいて分析した前田英樹（『定本 小林秀雄』、二〇一五）、小林批評とハイデガーの「解釈学的循環」との連関を指摘した浜崎洋介（『小林秀雄の「人生」論』、二〇二二）などの試みがある。

小林はフランスの哲学者アンリ・ベルクソン（一八五九—一九四二）から大きな思想的影響を受けている。小林とベルクソンの関係を扱った先行研究には、ベルクソンの科学論と突き合わせることで小林批評の新たな解釈を試みた山崎行太郎（『小林秀雄とベルクソン』、一九九七）、また、ベルクソン哲学との比較を踏まえ小林批評における経験の「一

回性」に着目した野村幸一郎（『小林秀雄 美的モデルの行方』、二〇〇六）などがある。しかし、以上の研究においては、ベルクソン哲学を基礎に、認識論としての小林批評の再構築に取り組みという問題が試みられていない。

柄谷は、小林が自己に与えられた「宿命」という、所与の事実の「事実性を信じる」ことを基礎に批評を構築している点を批判しているが⁽¹⁾、そこでは小林における「信」の内実が詳らかにされていないとともに、「信」に内在する主体的創造⁽²⁾という側面が軽視されている。そこで本稿での問題提起として、(1) 小林における「信じる」行為は主体的創造とどのような関係にあるのか、(2) ベルクソンの「形而上学入門」と比較した小林批評の独自性は何か、という二つの問いを立て、これら問題に回答を与えることを通して、ベルクソンと異なる小林独自の美学思想の特徴と、小林における「信仰」のありかを明らかにしていく。本論では、第一章で、内的に把握された経験の直接性が問題となるベルクソンの「形而上学入門」の分析を行い、第二章で、ベルクソンからの直接的な影響が読み取れるテキストとして、小林の「伝統について」及び「歴史と文学」を検討する。第三章では、小林が世阿弥を論じた「当麻」、そして第四章で『本居宣長』を扱っていく。

一 「形而上学入門」

まずベルクソンが二つの認識の方法について論じた箇所を引用する。

見かけ上の多様性に関わらず、哲学者は事物を知るための深く異なる二つの方法を区別することで一致している。第一の方法はこの事物の周囲をまわること示している。第二のものは、事物のなかに入りこむ。第一のものはそれを表現するために位置している観点やシンボルに依存している。第二のものはいかなる観点も取らず、い

かなるシンボルにも基づかない。第一の認識は相対的なものに留まるのに対して、第二のものは、それが可能であれば絶対に到達する。(Bergson, 1392-1393)

ベルクソンは二つのものの見方を区別している。「事物の周りをまわる」と認識とは何であろうか。ベルクソンの哲学の枠組みでは、私たちの認識はその大部分が実生活への有用性に向けられたものであり、特定の「観点」や「シンボル」に依存するその認識は、対象を外側から知的に観察するため、事物の生き生きと活動する生命の働きを取り逃がす傾向がある。一方で、特定の観点に基づかず、事物を内側から把握する認識がある。例えば、ベルクソン美学における知覚像は、過去の時間を保持する「持続」の働きによって身体の次元において構築されるものであり、そこでは主観と客観の区別が存在していない。⁽³⁾ それゆえ、自分の外側にあると思われる対象は、同時に自己の内部に生成する像でもあり⁽⁴⁾、「事物のなかに入り込む」認識とは、外的対象の把握と不可分に結びついた、自己自身を認識することと同義である。そして、この内的な認識は「絶対に到達する」ことが可能であるとベルクソンは言う。ここで言われる「絶対」とは、事象をその内側から生きる認識⁽⁵⁾、すなわち現在真に体験され生きられている現象を、他の経験と比較する外的な視点から眺めない認識のことをいう。それゆえ、「絶対」的なものの認識が問題となるとき、その内容が「真」であるかが問われるのではなく、自らが真に感得した経験をその内側から生きるという、認識の「形」が問題となる。「絶対に到達する」認識は、自らが自己自身を真に把握することと切り離して考えられない。

上記のベルクソンの方法は、小林が批評を行う際にも見出せるものである。すなわち、小林は、批評対象となる作品を科学的に外側から捉える手法を批判しつつ、小林の視点そのものを創造的瞬間における作者の

心理的動きと一致させながら、小林自らが真に理解したことを批評として提示しようとする。ただ、小林はベルクソン哲学をそのままの形で受容し、批評に応用しているのではない。そこには違いが見受けられる。上記のベルクソンの二元論は、ベルクソン哲学の至るところで見出せる、彼の中心的な思想的枠組みであり、そこでは意識に直接的に与えられたものの把握が常に問題となるが、小林はこの二元論を継承しつつ、「信」という行為を基礎に、彼が論じる芸術家や思想家が主體的に作品を創造していく点が特に強調される。以下の章ではその点を検討していこう。

二. 小林秀雄「伝統について」と「歴史と文学」

小林は一九四一年に「歴史と文学」と題した講演、同年に「伝統について」という小論を発表し、すでに自らのものとしたベルクソンの二元論を基礎に、独自の論を構築している。本章及び次章で取り上げる小林の批評は、戦時中に書かれたものであり、橋川は、西洋における「神」と同等の普遍性を持った「美」を提示し、「インテリ層の戦争への傾斜を促進」した点において、小林を「戦争のイデオログ」として批判しているが⁽⁶⁾、本稿では小林のこのような政治的立場からではなく、認識論としての小林批評を分析し、そこからベルクソンと異なる、「信」と結びついた彼の美学思想の独自性を示していくことにしたい。

「歴史と文学」において、小林がベルクソンから継承した二元論が読み取れる箇所がある。

古寺の瓦を手にして古えを想う時、僕は、過去と考えられた現在の或る心理状態というようなものを識別しているわけではない。いや、そういうものを識別する事が既に、瓦を手にして古えを想うという能力とは別の能力を要するであろう。言葉を換えれば、識別したならば、もう古えを想ってはいないだろう。僕は、まさしく手にした

瓦に、いかにも自然に、極めて直接に過去の人々の姿を読んでいるのである。この素朴な経験のうちに歴史というものの真髓がある。僕は瓦を単に観察しているのではない。瓦を経験しているのだ。『小林秀雄全作品13』92頁)

古寺の瓦を手にし、過去について思いをはせる際、そこでは「過去」と「現在」における心理状態の区分が問題となっていないのではないと小林は言う。過去を一種の過ぎ去った時間と捉え、「現在」の瞬間という過去にとつては外的な視点から古のことを考えるとき、実際に生きて活動していた過去の人々の姿がすでに客体として捉えられている。そこでは今を生きる「私」と過去の人々の間に認識上の距離があり、「私」は古の瞬間をその内側から、自らの経験として把握することが出来ていない。分析を通して対象の姿を明らかにし、事象の外から対象を把握する「識別」の働きからは、事物の生き生きと活動する側面が取り逃がされる。それが過去のものであっても、小林は目の前に生き生きと過去の人々の姿を感じ、自らの経験として関わりを持つことができるという。これは想像力も理性も含んだ経験であって、自らが過去の人々の姿を「読む」という、現在を生きる「私」の能動的な働きかけによって可能となる体験である。単に瓦を手にするだけで、過去の人々の生きざまが受動的に精神に現前してくるのではない。また、瓦という物質が契機となつて、古の記憶がそれを手にする者に蘇ってくるのでもない。そうではなく、身体的な次元で手にする瓦の中に、過去の人々の姿が読み取れるのである、この主体的な努力の中から、過去の人々との交流が生まれてくる。小林は、ここに「信じる」という行為が関わってくると考える。「伝統について」という小論では、次のように述べられている。

伝統に関する一番悪い考え方は、伝統というものを習慣と同じ性質

のものに考える事である。(中略) 僕らが無自覚で怠惰でいる時、習慣の力は最大であるが、伝統の力が最大となるのは、伝統を回復しようとする僕らの努力と自覚においてである。(中略) 伝統は、見つけ出して信じてはじめて現れるものだ。従つて、そういう事に努力しない人にとつては、伝統という様なものは全く無いのである。(中略) 伝統は、これを日に新たに救い出さなければ、ないものである。それは努力を要する仕事なのであり、従つて危険や失敗を常に伴つた。これからも常にそうだろう。『小林秀雄全作品14』38-39頁)

小林は、「伝統が何であるか」という伝統の「内容」ではなく、過去をとらえる意識のあり方に着目している。小林が評価する真の伝統とは、日々意識することなく遂行される反復的な行動という「習慣」とは異なり、今を生きる現在の「私」たちが、意識的にかつ主体的に見出さなければならぬ(何か)として捉えられている。日々の習慣的な生活において、意志を介在させる行為に抛らず「無自覚」のまま行われる行動を小林は「怠惰」と特徴づけているが、これは行動における怠慢さを意味するのではなく、意志的な認識上の努力が、生活上の有用性の中に埋没している状態、つまり自分自身に対して外的になつている状態を指す。一方で、「伝統」のうちに生きるとは、実生活への有用性に向けられ、自分自身に「無自覚」であるような認識を離脱し、自らの生き方が自覚的に「回復」されることである。小林にとつて、「伝統」という言葉で表現されるべきものは、日々の習慣の中に隠れ見えなくなつている、自らの能動的で主体的な意志を再把握する自己認識の過程である。

このような自覚的な意識のあり方を出発点として、小林は伝統の「回復」には、「信じる」行為が必要であるという。「伝統」を見つけ出すことは、その伝統内容が確固とした形として存在し、到達すべき目的地

として設定されるのではない。芸術作品の制作に失敗があるように、真に「伝統」が見いだされるときには、主体の意志的努力とともにその形が形成される途上にある、不安定だが生き生きとしたその動性が把握される。「伝統」の意味内容が明確になり、その本質を捉えたと思う瞬間、その生命は私たちの手を逃れる。対象を外的に捉える知性とは別の精神の働きのよって「伝統」は把握される必要があり、小林は分析的知性と異なるこの認識を、「信じる」行為と呼んでいる。

ベルクソン哲学においては対象をその内側から把握する直接的な認識が問題となっていたが、小林の美学思想においては、自己自身を真に把握する主体の意志的努力とともに、個としての人間を超えた「伝統」という、より大きな時間的持続の中に入り込もうとする精神の姿勢が「信じる」という言葉とともに強調される。上記の引用における「見つけ出して信じてはじめてあらわれる」という箇所は、見つけ出したのちに「信じる」という行為が行われるのではなく、見出すこととそれを信じる行為が互いに不可分であることを意味する。というのは、〈見つけ出した後に信じる〉ことは、見つけ出されたものを、信じるという二次的な知的操作によつて外的に捉えることであり、それは「伝統」という、見出された事象の内部から己を把握する認識とは異なるからである。このように、「伝統」という個としての時間的持続を超えた存在を、その内側から把握する精神の主体的姿勢を小林は「信」という働きとともに強調している。

次章ではこの点を、小林の「当麻」の分析を通して明らかにしている。

三、小林秀雄「当麻」

小林は一九五五年に「当麻」という世阿弥論を発表した。尾上は、この論考では「自由」が問題になっていると考え⁽⁷⁾、また、権田は、近代以降に生きる著者としての「僕」が、室町時代という過去へ没頭する

ことで、近代の病弊から逃れ出ることの観念性自体の暴露が問題となっている点を指摘している。⁽⁸⁾しかし、実際のところ、小林がここで中心的に扱っているのは人間の「姿」や「信」という問題系であり、そこにはベルクソン哲学からの影響が読み取れるとともに、ベルクソンと異なる小林独自の美学思想が色濃く表れている。以下その点を明らかにするために、小林が「顔」について述べた箇所の分析から始めよう。

老尼が、くすんだ葦色の被風を着て、杖をつき、橋懸りに現れた。真っ白な御高祖頭巾の合い間から、灰色の眼鼻を少しばかり覗かせているのだが、それが、何かが化した様な妙な印象を与え、僕は其処から眼を外らす事が出来なかった。(中略)婆さんは、何にもこれと言って格別な事もせず、言いもしなかった。(中略)自分の顔が、念仏僧にも観客にもとつくりと見せ度いらしかった。〔小林秀雄全作品 14〕135頁)

舞台上に掛かる橋の上に葦色の防寒具を着た老尼が現れ、白い防寒頭巾の間から灰色の眼鼻が垣間見える。そして、何も言わずに、特別なことも何もせず去っていく。小林は、老尼は自分の「顔」を観客や念仏僧に見せたかったのだと言う。ここで言われる「顔」は、老女の生の顔のそれではなく、仮面によつて隠された老尼の「顔」、日々の生活の中で移ろう表情の変化を超えた、老尼という存在そのものの「顔」である。小林はこのような確固とした存在が舞台上へ現れたその事実に着目し、そこから目が離せなかった。テクストの続く箇所を見て行こう。そこでは上記の特徴とは対比的に、移ろい変化する日常的な表情が語られている。

何故、眼が離せなかったのだろう。この場内には、ずい分顔が集つ

ているが、眼が離せない様な面白い顔が、一つもなさそうではないか。どれもこれも何んという不安定な退屈な表情だろう。そう考えている自分にしたところが、今どんな馬鹿々々しい顔を人前に曝しているか、僕の知った事でないとすれば、自分の顔に責任が持てる様な者はまず一人もいないという事になる。(中略) 幾時^二ころから、僕等は、そんな面倒な情無い状態に墮落したのだろう。そう古い事ではあるまい。現に眼の前の舞台は、着物を着る以上お面も被った方がよいという、そういう人生がつい先だつてまで厳存していた事を語っている。(前掲書、135-136頁)

日々の生活の中で忙しく揺れ動く感情は、素顔の上に直接的に表現され、どこにも隠れるところがない。そのような素顔に満ち溢れた場内には、どこを見渡しても「眼が離せない様な面白い顔」、すなわち移り変わりやすい人間の感情を超越した確かな表情が一つして見当たらないと小林は言う。そのような不安定さに満ちた場内の中で、仮面をかぶった老尼という時間の変化を超越した「形」が現れ、小林はそこから目が離せなかった。このような老尼の描写のあと、小林の視線は次の場面へと移る。

中将姫のあでやかな姿が、舞台を縦横に動き出す。それは、歴史の泥中から咲き出でた花の様に見えた。人間の生死に関する思想が、これほど単純な純粹な形を取り得るとは。僕は、こういう形が、社会の進歩を黙殺し得た所以を突然合点した様に思った。要するに、皆あの美しい人形の周りをうろつく事が出来ただけなのだ。あの慎重に工夫された仮面の内側に這入り込む事は出来なかったのだ。世阿弥の「花」は秘められている、確かに。(前掲書、136頁)

中将姫が舞台に現れる。小林は、彼女の姿が、移り変わりを常とする「社会の進歩」に対する、変化を黙殺した、純粹で極めて単純な姿をした「形」であると考えている。小林の文章の背後には、ベルクソンの二元論が常にその底流に流れている。引用しなかった箇所では、「能楽の鑑賞」という対象を外的に把握する知識人の態度が批判されており、時代の変化を超越した「花」を自らの経験として把握する真の認識は、知識人としての鑑賞家には見逃されている。対象を外的に理解する知識人にとって、外殻としての「仮面」の背後に宿る「花」は、彼らには「秘められ」たままであるがゆえに「花」である。そして、時代や社会の変遷、さらには個としての自己を超えた「美」を捉える開かれた精神の姿勢に、内的で直接的な認識としての「信」の働きの関わってくると小林は言う。

室町時代という、現世の無常と信仰の永遠とを聊かも疑わなかったあの健全な時代(中略)それは少しも遠い時代ではない。何故ならば僕は殆どそれを信じているから。そして又、僕は、無常な諸觀念の跳梁しないそういう時代に、世阿弥が美というものをどういう風に考えたかを思い、其処に何んの疑わしいものがない事を確かめた。「物数を極めて、工夫を尽して後、花の失せぬところをば知るべし」。美しい「花」がある、「花」の美しきという様なものはない。彼の「花」の觀念の曖昧さに就いて頭を悩ます現代の美学者の方が、化かされているに過ぎない。肉体の動きに則つて觀念の動きを修正するがよい、前者の動きは後者の動きより遙かに微妙で深淵だから、彼はそう言っているのだ。不安定な觀念の動きを直ぐ模倣する顔の表情の様なやくぎなもの、お面で隠してうがよい、彼が、もし今日生きていたなら、そう言いたいかも知れぬ。(前掲書、137頁)

室町時代の人々は、「現世の無常と信仰の永遠」を信じて決して疑わ

なかつたと小林は言う。そして当時とは異なる時代と場所に生きる小林にとつて、室町時代は決して未知の時代でも、理解不能な異文化でもないという。なぜそう言えるのだろうか。小林は、室町時代の人々における信仰や無常、さらには世阿弥が「美」というものを如何に考えたか、自らが目の当たりにした能の舞台を通して、自分自身の体験として経験することができると考える。前章で「伝統」について検討した場合と同様、ここでは室町時代の人々の信仰や世阿弥が見た「美」が客観的に存在し、到達点としての「内容」理解が問題になっているのではない。そうではなく、能楽堂で実際に目の当たりにした「美」の経験が、室町時代という時間の枠組みを超えて、小林自身の経験だと「信じ」られる認識の枠組みが問題となっている。言い換えると、小林における「信」という言葉は、文化的背景や時代の違いを前提に、異なる要素同士の比較を通して外的な分析に拠るのではなく、室町時代という個を超えた時の流れの中へ自らを置きながら、他のものとの比較を排した自らの「絶対」的な経験を語るために用いられている。

この点を踏まえて、次章では「信」の働きと主体的創造性の関係に焦点を当てながら、小林の本居宣長論を検討していこう。

四 小林秀雄『本居宣長』

本章では『本居宣長』における『古事記』論を取り上げ、以下の三つの節に分けて分析を進める。まず、第一節で本居における認識論の枠組みを確認し、次に命名という言葉の働きについて検討する。最後に、『古事記』における「信」の働きの特徴を示し、小林独自の「信じる」行為の特徴を明らかにする。

四 一 本居宣長の認識論

小林が本居宣長の思想のうちに見出したものは、対象を外側から眺め

る外的な視点に基づかず、自ら感じたところを率直に語る認識論の問題である。

文字も書物もない、遠い昔から、長い年月、極めて多数の、尋常な生活人が、共同生活を営みつつ、誰言うもなく語り出し、語り合ううちに、誰もが美しいと感ずる神の歌や、誰もが真実と信ずる神の物語が生まれて来て、それが伝えられてきた。(中略) 宣長には、「世の識者」と言われるような、特殊な人々の意識的な工夫や考案を遙かに超えた、その民族的発想を疑うわけには参らなかつたし、その「正実」とは、其処に表現され、直かに感受できる国民の心、更に言えば、これを領していた思想、信念の「正実」に他ならなかつたのである。(『小林秀雄全作品28』116頁)

ここで小林は「民族的発想」を強調する国家主義者としての本居像を提示したのではない。そうではなく、『古事記』という「神の物語」に対する知識人たちの様々な言論、そのような「特殊な人々の意識的な工夫や考案」という人為的な知的解釈を超えた先にある、「尋常な生活人」のあいだで長い年月をかけて形成された物語の「正実」さ、生活の中から生まれ出てきたその物語の確かな手ごたえに、本居の注釈がその基盤を置いている点を示そうとする。ここにも、物語を外から分析する知識人の姿勢と、無数の人々によって紡がれ継承されてきた物語に宿る生命の働きという、ベルクソンの二元論が読み取れる。そして小林は後者に「民族的発想」⁹⁾の真の意味を見出そうとする。この文脈で言われる民族的発想とは、世代を超えて人々に「信じ」られてきた物語の中に宿る、時間的持続を指す言葉である。そしてこの時間の層の厚みや、語られる物語の真実性を信じて疑わなかつた人々の心の「形」に、小林は『古事記』の魅力だけでなく、本居宣長の思想における「信」を見出そうとする。

彼「本居宣長」にとつて、本文の註釈とは、本文をよく知る為の準備としての、分析的知識ではなかった。(中略) 先ず本文がそっくり信じられていないところに、どんな註釈も不可能な筈であるという(中略) 極めて単純な、普通の註釈家の眼にはとまらぬ程単純な、事実が持つ奥行とでも呼ぶべきものに、ただそういうものだけに、彼の関心は集中されていた。神代の伝説に見えたるがままを信ずる、その信ずる心が己れを反省する、それがそのまま註釈の形を取る、するとこの註釈が、信ずる心を新たにし、それが、又新しい註釈を生む。彼は、そういう一種無心な反復を、集中された関心のうちにあつて行つた、何も願ひはしなかつた。(前掲書、161頁)

本居宣長にとつての註釈とは、本文を分解・分析し、そこに周辺の知識を当てはめて理解の解像度を高めていく知的作業を意味していたのではない。書かれた内容に対する全面的な信頼という、その「極めて単純な事実が持つ奥行き」を示すところに、本居による註釈の最も本質的な点があると小林は言う。テキストに書かれた、「神代の伝説に見えたるがまま」を信じる姿勢には、本居が自ら理解したテキストの姿を明らかにしようとする、「反省」としての自己認識の過程が含まれている。(10) すなわち、小林にとつての本居の註釈とは、自らが「見」たところを「信じる」自己理解の過程を指す。(11) 自らが理解した『古事記』というテキストの姿を明らかにしようとする「無心の反復」のうちに、本居における「信」という特徴がある。

次節では命名行為の特徴を、「言霊」との関連から検討していこう。

四・二 本居宣長における命名行為

古代の人々にとって言葉の使用は、各々の具体的経験に根ざす働きを持つものであつたと小林は考える。

「神代」とか「神」とかいう言葉は、勿論、古代の人々の生活の中で、生き生きと使われていた(中略)。宣長によれば、この事を、端的に言い直すと、「神代の神は、今こそ目に見え給はね、その代には目に見えたる物なり」となるのである。ここで、明らかに考えられているのは、有る物へののしかりした関心、具体的な経験の、彼の用語で言えば、「徴」としての言葉が、言葉本来の姿であり力であるという事だ。見えたがままの物を、神と呼ばなければ、それは人ではないとは解るまい。見えたがままの物の「性質性状」は、決して明らかにはなるまい。(前掲書、44頁)

「神」という言葉は、現実世界で「見えたがままの物」を、その内側から把握しようとする認識であり、対象に外側から張り付けられたラベルではない。「徴」としての言葉は、対象の生き生きとした側面を固定化するのではなく、言葉が同時に「具体的経験」そのものでもある、実際の行動と切り離せない認識のことをいう。言葉の使用に経験が先立つのではなく、両者は同時に一つの認識を形作るのであり、「命名」という二次的に思える思考過程も、原初の経験のうちに含まれた「意味」を明らかにする自己認識を意味している。そして小林は、言葉が世界を名付け形作る、創造的な生成の現場に着目する。

宣長には、迦微という名の、所謂本義など思い得ても得なくても、大した事ではなかつたのだが、どうしても見定めなければならなかつたのは、迦微という名が、どういう風に、人々の口にのぼり、どんな場合に、語り合われて、人々が共有する国語の組織のうちで生きていたか、その言わば現場なのであつた。「人は皆神なりし故に、神代とは云」うその神代から、何時の間にか、人の代に及ぶ、神の名の使われ方を、忠実に辿っていくと、人のみならず、鳥も獣も、

草も木も、海も山も、神と命名されるどころ、ことごとくが、神の姿を現じていた事が、確かめられたのである。(前掲書、82頁)

これまで論じてきたように、小林は対象が(何であるのか)という「内容」ではなく、その対象が意識にいかにも現れてくるかという認識の「形」を常に問題とする。上記の引用でも、「迦微」という名前の「本義」、すなわち意味内容ではなく、その言葉が人々の間で用いられる、その生き生きとした現場に焦点が当てられている。古代の人々にとつて、神々の存在は、客観的な事物として人々の実存から孤立して認識されていたのではない。海や山が神と命名され、人々に語られるなかで、神々の存在がそれぞれの瞬間に立ち現れ、神々の実在をさまざまな感じながら、古代の人々は日々の生活を営んでいた。言葉が発せられるその瞬間に、神々の存在意義が同時に立ち現れてくるような、存在論的とも言える「徴」としての言葉の働きには、単なる個人的な発明という意味での主体的努力を超えた、より大きな力が働いている。小林は次のようにも述べている。

上古の人々は、神に直かに触れているという確かな感じを、誰でも心に抱いていたであろう。恐らく、この各人各様の感じは、非常に強い、圧倒的なものだったに相違なく、誰の心も、それぞれの己れの直観に捕えられ、これから逃れ去る事など思いも寄らなかつたとすれば、その直観の内容を、ひたすら内部から明らめようとする努力で、誰の心も一ぱいだったであろう。この努力こそ、神の名を得ようとする行為そのものに他ならなかつた。(前掲書、86-87頁)

古代の人々は神をそれぞれが直接的に経験していた。そして、神についての直観は、個々人の意識を超えるほどの大きさと強さで人々の心を

つかんで離さなかつた。自己を超えた何か巨大な存在が各人の意識を捉え、その正体を見極めようとする精神「内部」での努力が、「神の名を得ようとする」主体的で意志的な行為として現れてくる。神々の命名が行われる以前、神々の存在は、まだ世界内部で確かな位置を占めるものではなかつた。もし人間が命名という意志的な努力を怠つたとするならば、神々の存在は世界の中で打ち捨てられ、顧みられることはなかつたであろう。その意味で、自らの意識に直接的に与えられた「直観」を明らめようとする命名という行為は、人間と神々の関係を築きながら、神々の存在をも創造していると言える。(12)

次節では、このような小林における「信じる」行為の中に、個としての自己を超えた、神々の声が響いている点を示していこう。

四・三 神々からの「信」の要請

親鸞の思想において、「南無阿弥陀仏」と唱えることで仏の慈悲に与ることができるよう、小林は、神々の名の「御号」を唱えることで、古代の人々は個としての自身を超えた世界に入ることができたと考える。

「天照大御神などの」御号とは、即ち当時の人々の自己表現の、極めて簡潔で正直な姿であると言ってもいい、という事になる。御号を口にする事は、誰にとつても、日についての、己れの具体的に直かな経験を、ありのままに語る事であった。この素朴な経験にあつては、空の彼方に輝く日の光は、そのまま、「尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物」と感ずる内の心の動きであり、両者を分離す事が出来ない。(前掲書、111頁)

「空の彼方に輝く日の光」、この「天照す」という世界の動きは「天照

大御神」として、また「誘う」という行為は、「伊邪那岐」や「伊邪那美」として命名され⁽¹³⁾、神々の名を唱えることは、同時に古代人の「自己表現」であったと小林は言う。ここに主体としての自己と客体としての外界という区分はない。自らの心に生じた情感は、世界の動きと不可分に結びついている。「御号」は各々の神々の存在に根ざし、デカルト的主体という枠組みを超えて、各人を世界の動きの中へと誘いながら、自己の表現を同時に可能にする。

「神代之巻」を本当に知るとは、(中略)「神代」とか「神」とかいう言葉に感知していた「言霊」の、そっくりそのままの力に捕えられる事であろう。(前掲書、44頁) 個としての人間が言葉を巧みに駆使し、神々を作り出すのではない。「神」という言葉を「感知」する「言霊」の働きに与ることで、上古の人々は、神々の名を伝える「神代之巻」の世界を真に経験することが出来た。「言霊」とは、権田によれば「身振りや手振りなどにも浸透しているあらゆる表現的機能」であり⁽¹⁴⁾、各人の言葉の働きに分かれながら、個々人を結び付ける根源的な言葉の力でもある。⁽¹⁵⁾ 第一章で扱った「伝統」など、個を超えた何かへ関わる際に「信」の働きが問題となっているように、個人を超えた「言霊」の働きに捕らわれることを通して、各人が神々につながる側面がここで示されている。そして小林は、「信」の働きは神々からの領域からやって来ると言う。

「宣長は言霊の働きも」空や山や海の、遙か見知らぬ彼方から、彼等「古代の人々」の許に、やって来たと考え他はないのであった。神々は、彼等を信じ、その驚くべき心を、彼等に通わせ、君達の、信ずるところを語れ、と言う様子を見せたであろう。そういう声が、彼等に聞こえて来たという事は、言ってみれば、自然全体のうちに、自分等は居るのだし、自分等全体の中に自然が在る、これほど確か

な事はないと感じて生きて行く、その味だったであろう。(前掲書、189頁)

この引用の前で、小林は、人間から独立した威力を持った自然に対して、古代の人々ほどのような態度を取ったらいいか、自然の「性質情状」を見抜こうとする人間の意識的な努力に宣長は注目していたと述べている。人間の主体的な努力が、個人的な意識を超えた「言霊」の働きに与ろうとする「信」を生み出し、精神のその能動的な働きが、海や山といった自然の「性質情状」を開示するとともに、古代の人々を、遙か彼方から来訪する神々に立ち会わせた。神々の来訪が人間にとって一種の贈与であるように、「言霊」の働きもまた、海や山の彼方から人間を訪れるものであった。そして、人間が神々の存在を信じているだけでなく、神々は上古の人々を信じ、自分たちの信仰を物語れという要請を人間に行っていたと小林は言う。神々の物語を語る人間の声には、同時に神々の声が響いている。この響きは、人間が自然から独立した存在ではなく、その内側から自然に働きかけ、恩恵や時には災害を受け取るという、尋常な生活の中から生まれる、神々自身の「信」とも結びついた、上代の人々の「信」の姿を映している。神々と心を通わせようとする主体的な努力の中には、個人を超えた神々の力が働いており、ここに古代の人々の「信」の姿がある。

五. 結論

序論では問題提起として、小林における「信じる」行為は主体的創造とどのような関係にあるのかという問いを立て、ベルクソンの「形而上学入門」から見た小林批評の独自性は何かという問題とともに、本論で考察を進めてきた。結論では、全体の議論を振り返りつつ、これらの問いに回答を与えていこう。

その大部分が実生活への有用性に向けられた私たちの認識は、特定の「観点」や「シンボル」に依存しつつ、対象を外側から観察する傾向が強いが、事物をその内側から把握し、「絶対」に至ることが可能な認識があるとベルクソンは考える。前者は、他のものとの比較を前提とした相対的な認識であるが、後者は、現に体験されている経験の内部から自らを把握する自己認識であり、事象の外部に立たないその精神の姿勢が、「絶対」という言葉で強調される。

このベルクソンの二元論を継承する小林は、自らの視点を批評する作品の内部、すなわち作品で語られる内容を自らの経験として把握しながら、自身の直観に現れる作品の姿を、そのあるがままの形で批評として提示しようとする。本論ではその点を、小林の四つの論考の検討を通して示すとともに、その中で、小林における「信」の特徴を以下の二つの点から明らかにした。すなわち、小林における「信」の働きのとは、(1)意識に直接与えられたものをその内側から主体的かつ能動的に把握しながら、(2)個人を超えた存在の生成の現場に参与するものである。

ベルクソン哲学においては、意識に直接与えられたものをその内側から把握する認識が重要なものとなるが、小林の思想においては、意識への直接与件の問題が自らの意識を圧倒するほどの強烈な直観として捉えられ、この自己を超えた何ものかを把握しようとする主体的な認識態度が「信」という言葉とともに強調される。第三章で論じたように、神々を生成する「言霊」の働きに結び付いた「信」の背後には、個人を超えた神々の声が響いているが、この声は精神の意志的な努力を導く原始の贈与のこだまであり、小林批評で強調されるのは、この動力を基盤に自らの意識に直接与えられたものをつかみに行く、精神の主体的で創造的な努力である。デカルトの主体における認識とは異なる、精神のこのような能動的な「信」の働きの、小林が継承したベルクソン哲学とは異なる、彼独自の思想の特徴がある。

小林は変化を超えた先に現れる、時代を超越した「形」の存在や「人間の変らぬ本性という思想」(『小林秀雄全作品28』203頁)についてしばしば語っている。小林は、テクストの普遍的でイデア的な、変化することのない永遠の姿を批評で提示しているという、柄谷に代表される批判がある。⁽¹⁶⁾「人間の変らぬ本性」といった特徴は、小林自身が持つ信念であり、時代を超えた普遍的な何かがあるわけではないということではある。しかし、小林の批評は、作品を読む中で小林自らがそのような感覚を実際に経験したという事実の上に成り立つものであり、小林批評の精髓は、二次的な思考プロセスである認識の正誤以前の段階で、自らが感動させられたという体験そのものを、確信をもって記述するところにある。そこに「創作」としての小林批評とともに、ベルクソン哲学を自らの思想として吸収し、それを基礎に様々な作品を独自に読み込んでいった、小林批評の創造的な側面があると言える。

付記

本研究は(公財)村田学術振興財団および(公財)上廣倫理財団の助成を受けたものである。

註

(1) 柄谷行人、中上健次『柄谷行人中上健次全対話』71頁。また、柄谷は「主体の意識を超えそれを強いる何ものかを「宿命」と呼んだ」(『近代日本の批評I』38頁)と述べ、小林批評における意識的把握を超えたものの存在と、その所与の現実が主体に「強い」られている側面を強調している。

(2) 橋川は小林批評を「決断主義」と特徴づけ、小林批評における「主体性」を強調しているが(『日本浪漫派批判序説』79頁)、そこにはまず個人を超えた(何か)が意識に入り込み、それを主体的に把握

しにいくという前者の契機が見落とされている。

(3) 拙稿『實在』へのアリア』第一部『ベルクソン美学』を参照されたい。

(4) Lapoujade, *Puissances du temps*, p.59.

(5) 戸島貴代志『創造と想起』18頁。

(6) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』82-83頁。

(7) 尾上新太郎『戦時下の小林秀雄に関する研究』157頁。

(8) 権田和士『言葉と他者 小林秀雄試論』124頁。

(9) この点について権田は、小林は「宣長古学に内在する宗教的要素や、『古事記』の記載を事実と考えた史学的要素、そこから生じる尊王思想とナショナルリズムという政治的要素を濾し去り、「人文主義的宣長像」を打ち立てたと考えている。(前掲書、184頁)

(10) この点に関して、浜崎は『小林秀雄の「人生」論』第一章第三節において、小林批評とハイデガールの「解釈学的循環」の関連について検討している。

(11) 二宮は、小林は「信じる」ことを信じる」(『小林秀雄のこと』117頁)と述べ、「信」の自己反省的な認識プロセスを指摘している。

(12) 上記の引用に続く箇所、小林は次のように述べている。「この行為が「神の名を得ようとする行為」が立ち会ったもの、又、立ち会う事によって身に付けたものは、神の名とは、取りも直さず、神という物の内部に入り込み、神の意を引き出して見せ、神を見る肉眼とは、同時に神を知る心眼である事を保証する、生きた言葉の働きの不思議であった。そう見て来れば、人々の神の直観の内容を比較し、その共通の特徴を選び出すというような事は、上古の人々の心ばえの裡に這入って来る余地はなかった事が解るだろう。」(『小林秀雄全作品28』87頁)

神は、「肉眼」で目の前に確かに感じられる、實在としての「物」である。「物」とは、客体として存在する単なる事物という意味では

なく、私たちが他者と生きた関わりを持つように、心のなかで確かな手ごたえを持って感じることでできる「實在」である。「物」という實在の「内部」で生き生きと躍動する神の動性が把握される際には、「肉眼」の働きが同時に「心眼」でもあるような、内と外が一体となったような認識、その働きが「神の意」さえ引き出すような、人間の主体的努力と一体となった、「生きた言葉の働きの不思議」が感じられる。まさに今この瞬間に感じられる神の實在を、事後的に共通の枠組みから捉えなおす知的な認識ではなく、精神内部で直観された神々の姿や形を明らかにする「徴」としての言葉が、神々の存在意義さえ創造する。

(13) 「古事記」の「神代一之巻」は、神の名しか伝えていない。「古事記」の筆者が、それで充分としたのは、神の名は、神代の人々の命名という行為を現している点で、間違いない神代の事跡だからだ。」(前掲書、85頁) 神の名は、それを命名した神代の人々の創造的な精神の働きを宿す「神代の事跡」として捉えられている。

(14) 権田、前掲註(8)、220頁。

(15) 拙稿、第三部第三章「言葉」と「信じる」行為を参照されたい。

(16) 柄谷行人「交通について」177頁。

参考文献

David Lapoujade, *Puissances du temps*, Paris, Les Editions de Minuit, 2010.

Henri Bergson, «Introduction à la métaphysique», in *Œuvres*, Paris, Presses

Universitaires de France, 1970, p.1392-1432.

権田和士『言葉と他者 小林秀雄試論』青簡舎、二〇一三年。

浜崎洋介『小林秀雄の「人生」論』NHK出版、二〇二一年。

橋川文三『日本浪漫派批判序説(一九六〇)』橋川文三著作集1(二九八五)所収、筑摩書房、二〇〇〇年。

柄谷行人「交通について」『批評とポスト・モダン』所収、福武書店、一九八九年。

柄谷行人編『近代日本の批評Ⅰ』昭和篇上、講談社、一九九七年。

柄谷行人、中上健次『柄谷行人中上健次全対話』講談社、二〇一二年。

川里 卓『「実在」へのアリア 小林秀雄のベルクソン受容から』晃洋書房、二〇一三年。

小林秀雄『小林秀雄全作品13 歴史と文学』新潮社、二〇〇三年。

『小林秀雄全作品14 無常という事』新潮社、二〇〇三年。

『小林秀雄全作品28 本居宣長(下)』新潮社、二〇〇五年。

前田英樹『定本 小林秀雄』河出書房新社、二〇一五年。

森本淳生『小林秀雄の論理』人文書院、二〇〇二年。

二宮正之『小林秀雄のこと』岩波書店、二〇〇〇年。

野村幸一郎『小林秀雄 美的モデルネの行方』和泉書院、二〇〇六年。

尾上新太郎『戦時下の小林秀雄に関する研究』和泉書院、二〇〇六年。

佐藤正英『小林秀雄』講談社、二〇〇八年。

先崎彰容、浜崎洋介『アフター・モダニティ 近代日本の思想と批評』北樹出版、二〇一四年。

戸島貴代志『創造と想起』理想社、二〇〇七年。

山崎行太郎『小林秀雄とベルクソン』彩流社、一九九七年。

山城むつみ「小林批評のクリティカル・ポイント」『文学のプログラム』所収、講談社、二〇〇九年。